パプア・ニューギニア視察報告

瀬　田　智恵子[1]

1．調査者と対象国

調査者：瀬田智恵子（メディア教育開発センター客員助教授）
調査国：パプア・ニューギニア

2．調査（訪問）時期

2003年８月12日―８月30日

3．訪問の主目的

JICA・Sonyパートナーズプロジェクト「ライブ授業放送を利用した遠隔地教育」における専門家チーム・メンバーとして、国立教育メディアセンター（パプア・ニューギニア教育省カリキュラム開発局の1部門）を拠点にプロジェクト参加校（Primary & Secondary School）のモニタリング、及びパイロット・スクール教師に対する「テレビ授業の効果的な活用」に関する研修の企画・実施および講師・助言者として活動した。幼児教育に関する調査はあくまで副次的、参考的な位置づけである。

4．「幼児教育」の調査方法

JICA開発パートナーズプロジェクト専門家として、モデルスクールおよびパイロットスクール視察訪問時に訪問校の了解を得て、該当クラス（Elementary Prep）の授業観察及び教師と母親へのインタビュー、関係文献の収集を行った。

5．パプア・ニューギニアの「幼児教育」の概要

①パプア・ニューギニアの概要

国土は日本の1.2倍の面積で、多くの島嶼から成り立つ人口450万人の国である。国力の増進のために人口増加を政府は是としているので、開発途上国の多くが直面しているような人口問題は小さい。しかし、多くの国民は自給自足的な生活を送っている最貧国の１つである。首都圏の平均的な月収は800キナ（約3,200円）程度と言われている。国の80％には、未だ電気の供給もない。家を建てるのも専門の大工ではなく、近隣の男性が協力して木造の一間の家を造る場合が多い。家を建てる作業には女性は決して参加を許されない。家の中は、壁に沿って１メートルくらいの幅の床を巡らしてある他は土の土間である。床は衣類、寝具類、などを置くところ、土間には炊事用具などがおいてある。

「わが国には物乞いやホームレスは居ない。」と教育省の行政官は言っているが、日本の人々の生活を基準にすると、成人男性がそこここで、昼間から何もせずに道路端で座り込んで仲間と話しこんでいるのは、ホームレスを髣髴とさせるものがある。男性に比べて、女性の生活は農作業や、生産品を大きな運搬用袋に入れて運ぶ役割、家事、子育てなど労度は大きい。

公用語は英語だが、700－800の部族語があり日常的には部族語を使用している。同じ部族語を話す人々を「ワントーク」と呼んでいる。ピジン英語とモツ語が部族語としては大きな分布である。国民の90％がキリスト教徒であり、イスラム教徒は非常に稀である。経済、教育などはオーストラリアの影響が大きい。

国は、現在教育改革プランを推進中であり、具体的には初等教育はElementary Prep、Elementary 1－2、Primary 3－8、中等教育はSecondary 9－12である。

②パプア・ニューギニアのECE

パプア・ニューギニアでは教育改革が行われ、改革前はGrade　1－10までであった初等・中等教育が、Grade　1－12になった。従前の小学校６年の部分が、Elementary Prep, Elementary 1, Elementary 2, Primary 3－8となった。Elementary 1－Primary 8までが義務教育である。Elementaryでは，部族語を使って伝統文化を重視した教育を行う。Primary 3からは英語による授業が行われるのでElementary 2で英語とのブリッジング教育をする。英語が学校での公用語になるPrimary 3以降で、ドロップアウトする子どもが出てくるという。

Elementary Schoolは子どもの通学に無理の無いこ

1 メディア教育開発センター

とも考慮する必要があるので、コミュニティ・スクールの形で比較的近い距離に配置している。Primary Schoolはもっと広い地域をカバーして設置される。コミュニティ・スクールにはノン・フォーマルなものも多数あり、ここでは教師は学歴でなくコミュニティの人々の信任で決まる。その基準は、Innovative（革新的）、Motivative（意欲的）、Creativ（独創的）であるかどうかを重視するという。

訪問した4校は、いずれもPrimary Schoolとは別の場所、ないしは同じキャンパス内でもかなり離れた場所に設置されていた。Primary Schoolの校長とは別に、Elementary Schoolの校長が配置されているが、Primary Schoolの校長の監督下にある。

授業を観察する限り、1クラスに1人の教師は配置され、教室も独立しており、他学年との混合ではない、50人のクラスには教師は2人ついている。行政が定めたカリキュラムはなく、教師が自主的なブレーン・ストーミングで教材やゲームを工夫している。アイディアとしては、オーストラリアの影響が窺える。窓がほとんど無く安全のためにドアを締め切ると空気の流通が悪い、あるいは、屋根と前後の壁だけの建物で風雨にさらされやすい、机や椅子はなくて子どもは直接床に座っている、トイレや給水が屋外に設置されている、など教室としての環境は不十分である。しかし、年間計画を基に週ごとの計画を立てていること，遊び中心的な学習の要素をかなり取り入れていることが特徴である。前年に作成した教材や資料の保存ができていないことが問題として挙げられる。

③観察事例から

パプア・ニューギニアでのECE調査は、本務とは関係の無い副次的なものであったので、断片的にならざるを得なかった。私立幼稚園1園も含めて、垣間見たことを簡単に列記したい。筆者の思い違いがある場合はお許し頂きたい。パプア・ニューギニアのECEに関しては、次回の年報に少し詳しく紹介したい。

ワードストリップ小学校（Wardstrip Primary School）　ポートモレスビー市内にあり、「ライブ授業放送を利用した遠隔地教育」（以下　「テレビ授業」）のモデル校である。モデル校の教師の担当する理科と社会科の授業をテレビを介してパイロット校、つまり実験的な受け手の学校へと配信する。

ワードストリップ・エレメンタリー校は、小学校から車で5分ほど離れた場所にある。木造の校舎は、窓も広く、比較的明るい。授業は、英語で物や色の名前と、数の学習である。教師は、黒板に花を書き、花の数を子どもに答えさせたり、色の名前を言わせたりしている。子どもは、女性教師の問いかけに生き生きと応じている。

校舎の裏で子どもの授業が終わるのを待っていた母親が3人いた。1人は、車で30分ほどのところから来ていると言う。2人は徒歩で来れる程度の近場に住んでいる。車で30分もかけて来る母親に、エレメンタリー・スクールに来る理由を聞いてみた。「学校で、子どもはいろいろのことを学んでくる。例えば、今教室でやっているような数を教えたり、言葉を教えることは、自宅ではできない。先生は上手に子どもに教えてくれる。」公用語が英語で、ピジン英語や部族語も使われ、エレメンタリー・スクールでは部族語が使用言語、プライマリー・スクールでは英語が使用言語、というパプア・ニューギニアのような国では、幼児への言語教育、数の教育も重要な意味を持っている。

校長へのインタビューをし、授業計画について話を聞いた。年間に大きなトピックをいくつか決め、そのトピックを更にブレークダウンして、言語、数、自然、社会、家族、衛生、などに関連した学習が出来るようにしているのだという。学年の始めは、「家」をテーマに、「自分の家のこと」「家族のこと」「お母さんのこと」・・・と言う具合に話題を広げ、子どもたちに話しをさせ、自己表現ができるようにする、など。

ポレバダ小学校（Porebada Primary School）　セントラル州に属するポレバダは首都のポートモレスビーから車で1時間ほどのところの海辺の地域である。ここの住民は、比較的仕事に恵まれているので生活水準は高いという。地域住民の拠出で、立派なトリニティ教会を学校の隣に建て直した。海辺のため学校も含めて家は高床式である。ポレバダ学校は、「テレビ授業」のパイロット校の一つであり、一学年4クラスを擁する大規模校である。ここのエレメンタリー・スクールは同じキャンパス内ではあるが、プライマリー・スクールとはかなり離れた場所である。他の校舎とはことなり高床式ではない。Prepのクラスは2教室で、プライマリー・スクールのような机や椅子は置いていない。

女性教師2人が担当をしているクラスを傍聴した。子どもたちは、「A、B、Cの歌」を斉唱したり、1人づつ順番にA、B、Cのパートをつないでいったり、教師が「Kの次は何？」の質問に答えたりしていた。次に、英語ではない言語で、ジェスチャーを付けた歌、おそらく「山が一つあって、そこに家があって、・・・」と

いう物語になっていると同時に数の学習にもなるような歌を歌っていた。30人近い子どもの中に仲間とは同調できない子どもが１人目立っていた。子どもたちの何人かは、革の靴を履きヨーロッパ的な服装をしていた。壁に貼ってある教材の中で、このあたりの部族語であるモツ語での数の数え方、年間の授業計画が印象的であった。天井や壁には子どもの作品である絵、モビール、紙細工などが飾られている。隣の教室は男性の教師であったが、子どもと共に学ぶという雰囲気に限って言えば女性教師のクラスの方が楽しげであった。年間計画はどのように立てるのかを尋ねたところ、皆でブレーン・ストーミングして練り上げるという答えであった。

放課後、近く行われる祭りのリハーサルを兼ねて、エレメンタリー・スクールの子どもたちが地元の伝統的な踊りを披露してくれた。子どもたちは踊り用のコスチュームをまとい歌いながら踊る。「ポレバダは一番良いところ。・・」という意味合いの歌のようである。伝統文化を尊重するという新カリキュラムの趣旨にも沿ったプログラムと見えた。女児も男児も腰蓑、頭飾り、下帯、楽器などの祭り用コスチュームを身に着けていたが、それらは保護者側で用意する。また、このような経費は保護者は抵抗無く支出するとのことであった。

ソゲリ小学校（Sogeri Primary School））　首都ポートモレスビーから飛行機で45分のところにあるゴロカから車で１時間ほどのところにあるイーストハイランド州の学校である。「テレビ授業」のパイロット校の一つである。ここのエレメンタリー・スクールも、プライマリー・スクールとは道を隔てて徒歩４、５分のところにある。広い敷地の中に、エレメンタリー・スクールの横長の建物がポツンと建っている。教室は３つ、壁で仕切られている。左右の壁以外にはドアも窓もない吹き通しの状態で、子どもは床に座って、正面の教師が提示する質問に答えている。

教師は、それぞれトピックに沿って４種類の絵を黒板の左側に描き、それに対応する英語の単語をアット・ランダムに右側に書く。傍聴していたときは天候に関するもので、「晴れ」「曇り」「雨」「風」などの絵と単語を指された子どもが１人、ひとつ線で結び付ける課題に取り組んでいた。その前の課題は、川、海、水、など水に関係するものを取り上げていたようである。授業はゲーム的であった。授業時間が終わりに近かったこともあり、エレメンタリー・スクール該当年齢よりも小さい子が出入りしたり、放し飼いの犬も２、３匹吹き通しの教室に入ってきたりと、識字的な学習であるのにのどかな雰囲気の学校である。壁には、それぞれの作業に対応して子どもをグルーピングするための一覧表が貼ってあった。ある作業には、動物の名前を取ったグループ名、他の作業には花の名前を付けた作業グループ名など。また、保健衛生、社会正義などを謳ったさまざまなポスターも壁に貼られていた。英語とピジン英語版であった。

授業終了後、担当教師に「学校を出てから何年経つか」を聞いたところ、「自分はえる仕事をしながら夕方教師になるための勉強をしている。もう、○○年教えているから、今度試験に受かると教師の資格をもらえる」とのことであった。「エレメンタリー・スクールの教師は、人物さえしっかりしていたなら学歴は問わないという考え方がある」と教育省関係者が言及していたことの実例がここにあった。

イースト・ゴロカ小学校（Easst Goroka Primary School）　ゴロカの中心地に比較的近い地域であり、イーストハイランド州に属している。ここも「テレビ授業」のパイロット校である。子どもの数の割りに校舎が手狭で、プライマリー・スクールの子どもを収容するだけで手一杯である。横長の校舎がアチコチの向きでいくつも建っている。エレメンタリー・スクールは、キャンパスの隣の少し小高いところにある教会の建物の一部を使っている。教会と言っても、木造の建物で、エレメンタリー・スクールが使っているところは、窓が小さく採光の役には立ちにくい。子どもの安全のために、木造のドアは常に閉められている。

ひとつの教室は男性教師、もうひとつは女性教師である。男性教師のクラスは、英語でWの付く簡単な文字の母音のひとつをブランクにして、簡単なヒントになる絵をチョークで描いておく。そこに入れる文字を当てさせる、というゲーム的な授業をしていた。walk、water、work、などである。壁には、絵とそれを表すピジン英語の単語をつけたアルファベット表が貼ってある。CoffeeはKopi、HouseはHausとなる。女性教師のクラスでは、食事の歌を歌っていた。これは、食事のマナー、食物の栄養などを歌詞に入れ込んであるようだった。ここにも、ピジン英語の単語表、「嘘はつかない」「悪いことはしない」などの戒めを箇条書きにした紙、などが子どもの作品に混じって張ってあった。Big Bookと呼ばれる教師の手製の絵本は絵や色使いが優れていた。聞くと、これらはだいたい１年限りでの使用という。これまで作成したBig Bookの保存にはまったく留意していない。これらをキチンと保存し、

他の学校とも使いまわしをすれば、もっと有効なのにという感を免れない。小学校の教科書が１冊80キナ（約3,200円）なので、大多数の家庭では学校備え付けの教科書を当てにせざるを得ない状況の中で、子どもの役に立つ本類の保存と活用は、教師たちが真剣に取り組むに値する仕事である。

サニー・バニー幼稚園（Sunny Bunny Kindergarten）ポートモレスビー市内にある私立幼稚園のひとつである。卒園生の多くはインターナショナル・スクールに行く。園児の多くは、パプア・ニューギニア駐在の外国人であり、日本人もその中に入っている。公立のエレメンタリー・スクールとはそのたたずまいや設備を全く異にしている。経営者はオーストラリア人である。

サニー・バニーは、半円を描くガラス張りの屋根を持つ、クリーム色を基調とした円形の建物である。道路沿いに開く、大人の身丈ほどもある擬人化したウサギの像の立つ門の右がわ少し奥まったところに園舎がある。建物の円形状の中央が受け付け事務兼管理用スペース、そこと同心円を描くように外側に年齢別の教室、教材室、昼寝室、食事室、調理室、屋内遊戯室、などが並んでいる。芝生で覆われた園庭には、ブランコ、滑り台、シーソーなどの遊具、屋内の遊戯スペースには、フィンガーペイント、積み木、ブロック、など先進国の幼稚園ないしは保育施設に備え付けてあるようなものがおいてある。子どもの日課には、自由にそれらで遊ぶ時間が組み込まれている。壁に貼ってある子どもの作品などから推察すると、識字教育的なものはほとんど行われていないように見えた。保護者の付き添いで子どもは登園すると、受付事務スペースで靴を履き替える。責任者と思しき女性は子どもを歓迎する言葉をかける。子どもの今日の状態について保護者と２、３言葉を交わし、子どもを担当教師に引き継ぐ。ある教室からは、「Twinkle, Twinkle, Little Star」の歌声が聞こえてきた。授業料などについては、キチンと聞く機会がなかったが、かつてこの幼稚園に子どもを入れていた保護者によると、この幼稚園は私立のインターナショナル的な機関としては中程度のところだが、それでも１人年間100万円程度かかったとのことである。

④今後に向けて

パプア・ニューギニアは、幼児教育支援を目的に訪問した国ではない。したがって訪問校も「本務のついでに」という制約のもとでのものである。しかし、本務の関連で2002年８月に行なった「子どもの生活に関する調査」の結果は、われわれに「幼児教育」について示唆を与えてくれる。

この調査は、パプア・ニューギニアの子どもたちが、学校生活を楽しんでいるのか、放課後どのような時間を過ごしているのか、将来はどのような仕事をしたいと思っているのか、学校はどのレベルまで進みたいと願っているのか、などについてパプア・ニューギニアに既存のデータがなかったために行った。対象校は、セントラル州のポレバダ小学校（前出の「テレビ授業」パイロット校）、及び他の１校、イーストハイランド州のソゲリ小学校（前出の「テレビ授業」パイロット校）である。学年は、７年生である。本稿のテーマに関係する部分のみを紹介する。

児童の放課後の生活　児童のすべてが放課後には何らかの家庭内社会参加（家事、子守り、生産活動への参加など）をしている。帰宅後にすることとして、宿題を挙げる子どもはいるが、どちらかと言えば「自分の制服の洗濯、部屋の掃除などと並列の重さで意識されている。予習・復習、けいこごと、学習塾的な学習を挙げる子どもはいない。

授業科目　児童は自分に役に立つ科目として「英語」を挙げている。これは、就職には英語が不可欠なことを反映していると考えられる。

将来の職業期待　将来就きたい仕事として、銀行員、会計士、パイロット、医師、看護婦などを挙げており、農業、漁業などは少ない。これは、行政官等のコメント、「子ども達は、地域で農業や漁業をするのだから、それに役立つ授業が大事」という言葉とは乖離がある。

学歴期待　子ども達の学歴期待は、大学（カレッジ）あるいは中学校（Secondary。Grade 9－12）で、Primary（Grade 3－8）を希望する子どもは皆無に近い。

学校生活　子ども達は学校を楽しいと感じている。

子どもたちの放課後の生活は、第２次世界大戦前、あるいは1950年ごろまでの日本のそれによく似ている。学力競争とかイジメ、引きこもりなどは身近なものではない。しかし、パプア・ニューギニアの教育関係者が考えている子どもの将来像と子ども自身が期待していることには、大きな乖離がある。現実の実現可能性はともかくとして、子どもたちは、収入の安定している職業は何かということを既に知っているし、職業生活の上で英語が必需品であることも認識している。放課後の生活などはよく似ていた筆者の子どもの頃、将来の職業に、銀行員、会計士、パイロット、医師、などと具体的に挙げることのできた子どもはそれほどは居なかった筈である。電気も80％の地域には供

給されていない、テレビをもっている家庭は学校では校長先生くらい、新聞も多くの地域ではアクセスが困難、親たちの多くは農業・漁業従事者という国でも、情報化は確実に進行している。

教育改革では、エレメンタリー・スクールは地域の文化に密着した学習、部族語を尊重した授業をすることを奨励している。しかし、これが幼児教育を安直なものにしないように、子どもの好奇心、探究心、学習意欲を阻害するような学習活動にならないように関係者は留意する必要があるだろう。開発途上国の多くがそうであるように、パプア・ニューギニアでも納得のいく教育機会を得ようとすれば、途方も無いコストがかかる。平均的な家庭の子どもにも、本人に意志と能力があれば将来の職業選択の幅が広がるような教育機会を享受する権利はあるはずである。「子ども中心」のコンセプトのもとに行われる幼児教育が、子どもの学習意欲を育むと同時に小学校教育の質の変容の手がかりになり得ることをパキスタンの事例は示している。パプア・ニューギニアの教育改革によるエレメンタリー・スクールの教育が同じような役割を担うことを願うものである。